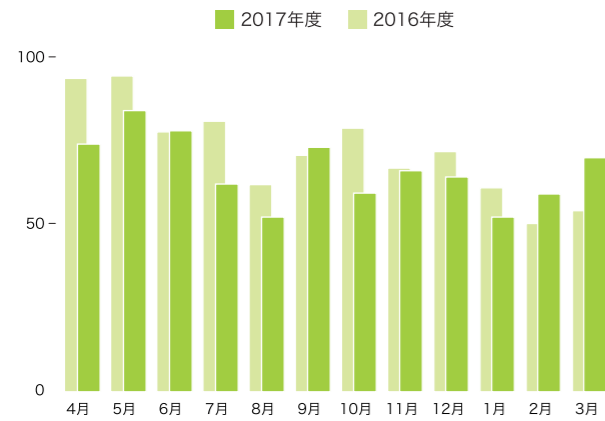


## 2017年度 支援活動報告(データ編)

## 2017年度のデータ検証の前提

リハビリテーション従事者向けの連続研修を2日間に集約し内容の焦点化を行いました。また難病ITコミュニケーション支援講座を入門編と実践編の2回開催とし、基礎的な内容からより高度な内容まで幅広く取り扱う講座に充実させました。支援技術の知識を持つ専門職を地域に増やす方針に沿った活動を行ないました。

## 月別支援件数の推移



大きなピークはなく、支援件数は昨年度後半から安定して推移しています。年間674件で月平均の相談件数は67.4件でした。

## 月別支援件数の推移

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
2017年度	75	85	79	63	53	74	60	67	65	53	60	71
2016年度	95	96	79	82	63	72	80	68	73	62	51	55

(単位:件)

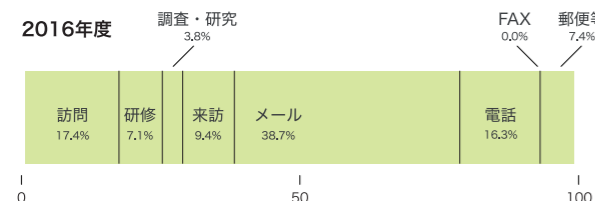
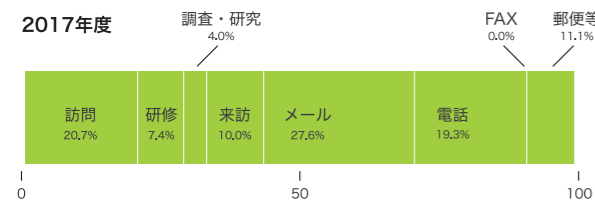
## 相談方法別の割合

昨年度に比べてメールによる支援件数が大きく減少しました。市外への訪問支援が打ち切りになりメールによる代替を行なっていますが、それがひと段落したこと、メールによる質問を頻回に寄せていた一部の利用者からのメールが減ったことが主な原因と考えられます。他は概ね横ばいとなっており、一定のニーズがうかがえます。

## 相談方法別 集計

	訪問	研修	調査	来訪	メール	電話	FAX	郵便等
2017年度	167	60	32	80	222	155	0	89
2016年度	152	62	33	82	339	143	0	65

(単位:件)



## 障がい種別の割合

障がい種別では昨年度と同様の傾向です。

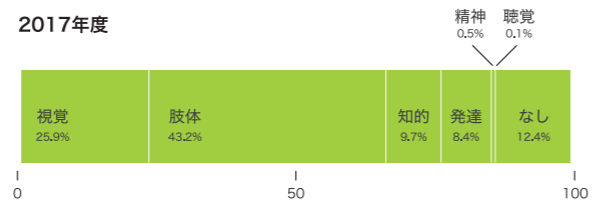
【肢体不自由】 コミュニケーション支援に関する相談が増加しました。難病ITコミュニケーション支援講座で実践的な内容を扱うようになったことがケース相談に結びついています。【視覚障がい】 新潟大学医歯学総合病院眼科ロービジョン外来や大学の公開講座を中心に支援を行なっています。タブレット端末の活用に加え最近ではスマートスピーカーにも関心が高まっています。【知的・発達障がい】 継続的に支援技術に関する研修依頼が学校から寄せられています。主に教育分野でのニーズが高いのが特徴です。

## 障がい種別 集計

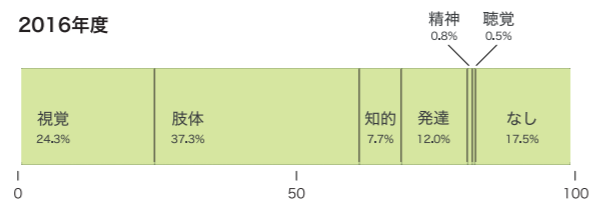
	視覚	肢体	知的	発達	精神	聴覚	なし
2017年度	219	366	82	71	4	1	105
2016年度	234	334	72	104	6	5	148

(単位:件)

## 2017年度



## 2016年度

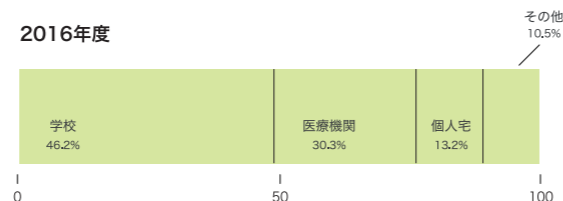
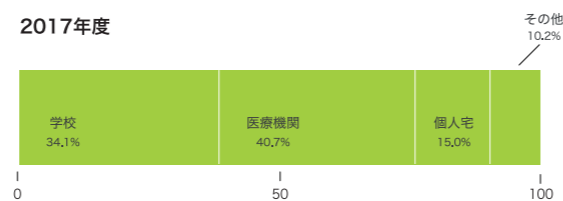


## 訪問先の内訳

医療機関からの訪問依頼が増加しています。主に肢体不自由分野でしかもコミュニケーション支援に関する内容が多いのが特徴です。割合としては減少していますが、学校からの訪問依頼もほぼ横ばいの水準で、研修依頼も続いています。インクルーシブ教育が推進される中、支援技術への期待も高まっています。

	学校	医療機関	個人宅	その他
2017年度	57	68	25	17
2016年度	70	46	20	16

(単位:件)



## 特例補装具

### 視線入力装置の申請について 基準額を超える補装具の要否判定協力

基準額を超える補装具は「本人にとって不可欠であり、真にやむを得ない」場合、特例補装具としての支給が認められる場合があります。高額な視線入力式的意思伝達装置の申請にあたって、当センターでは家族や介護福祉士と協力して、本人のコミュニケーションに関するデータを収集し、意見書を書く主治医のため参考資料を作成しました。



## 特別支援教育

### 教育分野では「インクルーシブ」と「ICT活用」がキーワード

特別支援学校や一般小・中学校、教育委員会から研修依頼、ケース相談が今年度も寄せられました。障害者差別解消法の施行後、障害のある児童・生徒が通常学級とともに学ぶインクルーシブ教育に関心が集まっています。インクルーシブ教育を実現するため、障害を補う支援技術は重要な鍵になっています。新潟市内でも市立の小・中・特別支援学校にタブレット型PCが配備されその活用方法がさまざま模索されています。当センターではマルチメディアDAISY教科書やタブレットを使ったノートテイクについて研修や提案を行いました。障害のある児童・生徒に対する個別の合理的配慮のひとつとして支援技術が十分に活用されるよう、今後も情報提供や個別支援を実施していきます。



## 視線入力

### あたらしい機器操作の可能性「視線入力」 子どもから大人まで広がるチャレンジ

視線入力装置の導入に当センターが初めて関わったのは2013年でした。それから4年、機器の選択肢が増えて、さまざまな現場で利用されるようになりました。肢体不自由のあるユーザのため標準で視線追跡機能を備えるOSも登場しています。特別支援学校では、マウスやキーボードがうまく使えない子ども達のあたらしい入力装置になっています。機器操作の負担が軽くなったことで学習の幅が広がっています。また、今までPC利用をあきらめていた肢体不自由のある大人にも新たなチャレンジとして利用が広がっています。次年度はデモだけでなく貸し出し機器を充実させ、ニーズに応える予定です。



## 養成講座1

### 新潟県作業療法士会・言語聴覚士会との 共催で養成講座を実施しました

第4回障がい者IT活用サポーター養成講座を実施しました。今年度からはスタイルを変え、新潟大学五十嵐キャンパスを会場に二日間の短期集中講座になりました。受講生から要望の多かった肢体不自由分野を中心に、知的障害や視覚障害、聴覚障害、発達障害、高次脳機能障害に関わる支援技術を広く学ぶカリキュラムになっています。受講したOTやSTには生涯ポイントが付与され、専門職のスキル向上の場として機能するよう工夫されています。次年度も開催する方向で現在両県士会と打ち合わせを行なっています。



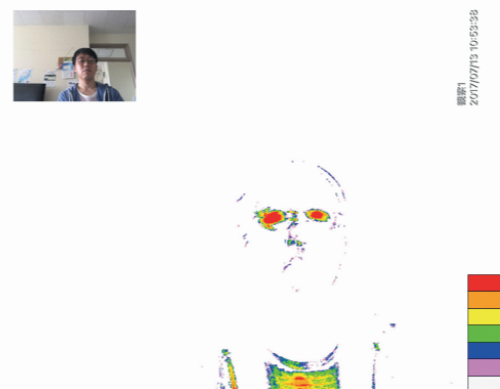
# 2017 TOPICS

## 2017年度 支援活動報告 6つのトピクスで 1年の活動を振り返ります

## 重度重複障害

### 重度重複障がいのある子ども達へ 支援技術を生かしたアプローチ

肢体不自由と知的障害が重複した子どもへの支援方法として、スイッチやセンサーの活用は有効な手段の一つです。わずかな動きでもセンサーで検出して光や振動、音に連動させることで、外界とのつながりを学ぶことができます。社会参加の一形態にもなります。当センターでは夏休みに重複学級を担当する教員を対象に教材作成を実施しました。光や音のおもちゃを障害の重い子どもに使えるように改造することで、あたらしい可能性が見えてきます。また、支援者による読み取りが難しい、微細な動きをIT機器で可視化し、授業や支援に活用する方法も提案しています。教員の経験知とIT機器の組み合わせであたらしい教育方法が開発されています。



## 養成講座2

### 難病ITコミュニケーション支援講座・実践編 を開催しました

新潟県難病相談支援センターが主催している「難病ITコミュニケーション支援講座」に今年度も協力させていただきました。今年度はカリキュラムの大幅な見直しを行い、今までの講座を「初級編」とし、現場ですぐに活用できる内容の「実践編」が追加されました。実践編では支援技術や福祉制度、実践事例に関する座学に加えて、疑似症例に対する提案を参加者同士で相談して作ってもらうグループワークも盛り込まれており、文字通り実践的な内容になっています。コミュニケーション支援を必要とする患者や利用者への対応に悩んでいる参加者も多くおり、講習後には当センターにケース相談が持ち込まれました。支援者間が情報共有し交流する場としても機能していくことでしょう。実践編は次年度も開催予定です。

